み集

へ 5
1849

入湯之序

伊勢乃源竜ハ山中より湯ゝ乃全体之紙ゝ
東西坊ゝ 伊勢より詠中ゝかもむきて
源竜日あゝさる 元宮と東西坊ゝ
ゝゝ井戸の かゝれ ゝゝ 源竜むかし
源化のゝあれ乃さる ゝゝと 井宮ゝ
いつもあ井宮ゝ おうゝ 源竜ゝ 一ゝ乃
ゝゝゝ ゝゝ 東西坊 ハ十二月の湯宮
あゝ人ゝゝゝ死の宮井ゝ ゝゝ又
ゝゝゝゝ ゝゝ比比源竜の湯とひゝゝ
ゝゝゝ 俱利加羅乃坂詠ゝゝ

俳諧ハ万人一生のなぐさみといへり
ことものつきせねバ道しれる風流
青桐の誹諧さへハ孫子の楽書て
名もなきよりのあらまし毎何湊ハ笑謹
てし呼つきの流行詠て多年
みるハたからと人々脈より伊勢
新し流の雲ハたとしぬちのこなり
花し古来ハ此道そこ毎進業年
草れいと海ハまましけ連と山中
入湯の序をひら何寺の花と書よし冊ハ
かなれ文章ハ此編輯の沿御井んとく
此月舟の筆紙のねたてよりおめくしきれ

あと継すなひ筆を乞れ一筆請上ハ流まより
進業の近ろす せのまゝて此書事のふとり
の乃ま一文章そんてすみのつし年
犯筆帰し世九月の中比かよ小枝ハ三十より
立御て凉風ハ山中の一集ま一觀向そ觀ありと
おと流うち冊てされそよ誹諧ハ寂てら深りを
味ゆてあそうらんまハいさや梅の花の名を照
せんと人々脚の縁をたむ紀ま有流行
流れハ好ましくとあれと一方の流化かくや流
都まて此舟の手業いちえくりやそこれ世念を
志りし御家まて於る兵ハ万子亭の一巻を
くまか画し ある東ハ海羽川の初鐘に匂ひ

生死ハ与して市中をけゆらんをその
作を人さまのすれと無念かな語ひ者り
東花坊ハ此世にあるあいだ涼菟に言北風流ハ
人つくされぬを時の花むきになりて変化せさる
無念ハすこし一年しれ世ニ念めて何の発句は
誠の発句ニなさる事を一生の無念あらんと
かまはりては申ニ神ハいふ也十ニ十をめすへく
此母誠ハ露化とこ無るふ人あるまと無窓の口より
中に語られし此翁の談念といふ涼にハあらは
無念千万といふ物也

支考序

金城

山や一こゆしつて秋の雲　涼菟

宿かりの手に夕はつんぶり　万子

新もうかつる男のあとふえく　北枝

菰の中うれしさくの道　里臼

そよそよし松の陰に桐の花　従吾

虹の中しを　ひきこされいき　長緒

笠ほけて拍けて紅を含んで　八紫

町のそつ長い白髪　牧童

吹なる枝の木　紅の者　乙由

うけてハ都て山の紅葉ちらく　苞

れ来ハちんちんちりの元文意　子

義氣と又かゆうこさもの　杖

仇屋の焼きぬ紅なり　臼

十九　井口乃舟のかりく　長

蘇の者ようちりと折ちる　弦

高木屋寺の紅葉へ　宗

花の伝次郎竹かと色かな　青

緑の清き乗の紙ちり　山

鳥とハ生き上って雑子の声　苞

かきてんぐ替ふるふ　子

かゝ紙ま鬱陶ふ時を立ぬ　楼

何ふとかゆ毎　姫の　臼

かくしの内をこそ絞こうるさうに千葉
柳通りたる鼻を汗かく
玉鉾が葉を安倍の柔毛の
うろ姿乃笈を重ね
軽あり松ハ青ほと咲て
紀文の昊天を捨う
うついて庶ら母衣れ言葉
秋ハ青ら連奇能能

淺茅生

物すごき市中を通る清瀬川　清菴

旅人ひとり笠ぬれ秋風　牧童

萩落葉あらぬ木の目もなし　南甫

こゝろなる山ハ元きり　北枝

ぬれかゝる窓の雨　三之助

しとゞ時雨ハ降り庵　從吾

明かゝる樓の焉　つゝ　童

少し燒時も紙敷　敷て　甫

こゝ〻ハ有しなつかしぬ御結　枝

却て世せこゝ姫　久　戸　吾

二寢こゝハ夕夕却て　ぬこゝ　寢　菴

おろ〻こゝ飯のまゝ　茶て　兵　子

一番茶　叔ろけ　こゝ高首　地　甫

田出ぬ　庵　地　こゝ　枝

はまてこちハ果るに婚礼ハ法　吾

初鰹の値段　あつ〳〵ゝ　苞

高ハ戸に畑ものと　孝

あまき　ゆ和て　丹むせ吹　甫

俗紙をはてんこうもの　枝

紙をハ幾百　備　吾

いや〳〵といへと温飩をあけて　苞

貫さ〳〵　めのこ暮雨　孝

一棟ハ見えて重の八幡宮　甫

よ〳〵京雀ほ〳〵　鳴　枝

杖ついて傘　指て　織　名

蓑ハあうとはいふ　苞

かもえくれ和の　孝

夏波紙　ゆ　孝

色くれ中ハ　榜ハ　蓑れ　甫

和尚ハ　御て　石兵の　枝

一迫うへ　吾

かくひときすの子を冨士に又河内冨士　蕉
山もなうけ母何もかも霞　素
一国厩て馬は引てけり　甫
律儀八幕年朝まてかり　枝
松林時雨と備えて神社庵　哲
轉役かいて緩しもおき猶病の跡　筆

山中ノ吟

薫物の匂ひて來る案摩の　里臼
菊かくしきえきれの鳴呼　山由
十ぶんにほまて桜の頭顔　涼花
とうの新にににころの傘　旧
何事里と一ともして牛此角　由
廣い野原平ノ方との乃色　竜

茶の花まさかり咲く頃 閑居 臼
秋の川 ゆき暮れうつかる 由
死うとハ 哀とあうぶも 安大 竜
そ文 ゆみ 松 五 畜生 臼
小町 そ山 焼もそ 業 捨 由
柳 ハ六 田 紀ハ こよ 壁 竜
あ〻 さる 畠を 茶 知 降 屋 臼
月 ゆ 月 ゆ 月 ゆ 由

病人 ゆ 絶 あ うつて ゆめ みそ 竜
閑利 こちらん 廉 相 あ 万 臼
南の 紅 紅 〻 き 和 ね ち 〻 由
こ 〻 〻 と 〻 の お 通り 竜
松風の一息 ゆ 埠 ゆ 臼
竹 ゆ 猫 戸 内 ゆ 由
形 〻 日 渡 祇 の 三 信 濃 〻 竜
そ 紀 の 竜 さい て ゆ ゆ 臼

何神を祈華奉いたすらん　由

猶いぬまでも紅葉ゝ分る　竜

手折る枝屋根迫まで行あるを　臼

藪の花の香ハ吹もてり　由

大文字のそらけなるまで　竜

赤い小袖手　巴山の井　臼

身の毛孫ゝ立ち無ま　有かるを　由

り　踊の去も蓋のかもかけ　竜

聖見の立事を泣い抱ま　臼

くるるを切れ　由

巴山の狐の言る　竜

七ッ門の志むら鹿吉　臼

くるも六郎ま竜のハ言ひ　由

茅の蛙の　竜

新年

かんくと流しや草よの年　乙由

楊も林みな月にあゆみさくる　凉菟

小男か席の角振かへる列て来る　里臼

町の子つれ来茶旧跡　自笑

猫やらんに笠かよう仏さくれ里笠　水寿

あぢらに花る家集仰家の色　由

此頃はさんこもうまれかんとる　芭

雨さつほどと純さみ日吉也　臼

花供のうし綱深にひきて　笑

田舎では文芝も御地也　寿

いつかこの岩にも梅も茶乳えれ　雨

こねか色しくる虫乃声く　芭

桜さあすに夜更の夜の晴て昼　臼

径もうし也もひとよ　柾穹　笑

新田さの寒中さくらんぼをたべて　吉
花白うめつゝれる初年　由
一日鶯の梅の花はいつ咲　竜
梅うの定ゝ招流う宝　臼
そは初能形ようのき餅　笑
寒中海苔の多きは雨　吉
誓文の高く通るぬけ　由
代墨さは椿と梅の高　竜

時雨に大江丸屋の門のうへ　臼
行て母かてもり屋の鍋焼　笑
赤松に赤土山は寒かるる　吉
寒の墨りハ十二月四日　由
遅松の鍋に添て世を釈し　竜
師走の寒き有り寒い鍋焼　臼
師走の寒ハこゝろ星の船　笑
松の乃俳諧の中ゝいつそ　吉

打角とこ宦ハ隠しか毎日のみえへ　由
扇の形り今も枯芝　苞
張慕ふと出る人ゑめくる会　臼
やうるるかく梅乃雪解金　笑
酒盛りし小鼬持まな畏の毛　圭
歯角より岸て勝の白玉　章

重陽

三國

綿抜ん小盤様やんきく咲く　胙嚢
葡萄の紅粧取ていて九　琴之
漾きみ廻りに花の限もなし　播東
此川筋の海を寂ミて　水青
材木の葉紙乱して毛の梅　涼莞
裸て弄でかしとまるなり　嚢

難思を屛風一重に帰る道　之
祖か方の上も心くせもの　東
葉にまた膝をあらふかし衣　吉
そのくせ是れ折ありし愛也　芭
去しとあん世の菓を拭く宇治の里　嚢
初ものゝ初え山はうくされ　之
あふまてく浮世浮瀬の元ある海　東
立て臥とる梅も墓参り　吉
茶かうす十年ハ身夜打て置　芭
あちらく詠て物を見る近ル　嚢
狩馬のこ鳥の中まり補陀き　之
門至り桃咲くに仏すへ　東
出代りのこゝろ安き袖のいつ大かた　吉
そのまゝ浮世鬼ハ出しか　芭
わくらまてゝわくら庇中ん明る　嚢
あの男身ハ花いよ今親　之

竹ばかりをひの黒こほ白い雄　京

寒へつくしは紅ゝ白ゝ　吉

むかしきやうくも四十の老の涙　菊

ちりと見んきぬぎて見るかな　義

みろまをとりの袴も今五也　こ

四五日晴れて京はやうゝ　京

江戸は又あれの蕨かまへ　吉

宴持ちつまかゝ歳けも　菊

雁（カラ）の字は中ゆ江戸の声　義

海と寒さも　寒　古の池あり　こ

はりやしの一さけ元ぬ山ハ明　京

あるさ歩げそ見もゆるゝ　吉

代さ掛ゝ打もそ心花ぬ　菊

蝶といそるゝ身を　寒

醫王山長谷

風雅を楽しみぬけてや御馬　李寿

あまたの人々の宴席一村　源苑

月の新そめの人の花をうりて　みち

いくとせよりの世業也　し由

這迎るゑ芸者あつかまり　里印

二百年宴会ゆ　捨家　仙　雲竜

[illegible]　里楊

[illegible]　方誰

[illegible]　桃蚊

[illegible]　如

[illegible]　苑

[illegible]　寿

山村安河村流も　苑村　今　由

[illegible]　印

さかり咲て八重あるき好キ　亀
人に為はつかね六十　揚
月星も見よの備に晴渡し　泝
秋白虫は夜は見つる堂　蝶
しら露に天窓の白き秋坊主　和
晴暮るゝえそれて筆をとる　揚
そよそよと嵐の亘和中良ん　由
貧乏神の夜も寝させぬ　吉

火燵にて子ねくらに飽きて　芭
錢つかう打鉦やすうり　宅
虔じ逸えめつらにひろい浮世也　臼
鰍の竜に風の一吹　雅
川水に晶れ見かは体まぜて　妖
袒女も祖母と打追ひを待ッ　和
摘てし芹春れ春の新　物
秋をかはつる菊の香し　由

そろ〳〵と生いて高さ五の寸 去
言かりをふるかはハ言無仮 竜
方〳〵此葉を蟬此 呼は舞一 竜
一此字姫ゝ日髪之之ゝ 臼
上ッて也ゝ是ぬ形葉の法 祇
山山軍の 桃此 いろ〳〵 妖

入湯會

冷水半ハ上ッて此此火焼る 涼莞
秋を居ゝ出る 猿の猫 魚 桃妖
二口や〳〵三口や〳〵身の本原く 里臼
うす音わるゝ山みくゝ内ゝ 北枝
小男の義ゝて こゝ行ひ歩く也 山由
行仮根 蕣下て 毛 行らん 苞

ヒイラロと切なく出る芽の声　妖
袖をぬらして第五の物　臼
夜形は大いかけて夫　枝
新茶　古茶　第五　君の一言　由
新草　雑　拝申す　恋して　苞
別恵の涙　雪月花　妖
幽霊の陽炎　白い油　臼
夏を出して　鶯の声　枝

暑さより元気は出て　由
来て作る　毎年　萩の茶　苞
笠なるより　志賀の花盛　妖
竹ひらい　畑打ち　臼
恵の方へ　ちらと　食也　枝
くさるやいなや　江湖器　由
竹ばかりの　ちらと　藪みち　苞
長崎　みのくと　有　妖

よい藤仏おもてに彫れる　白
本の日と酒の力死　枝
仏をまつりて世を捨てて　由
うす梅の梅も咲きて　義
虚をついてこちらの仏　蛾
表は分離を彫りけり　白
念仏もそこそこ　枝
近い所を　由

ちらかして毎晩の雪
部屋へ入れて　紅梅　妖
山伏の足をまるで　白
蔵掃除　梅
引きずりて　由
雪の一夜　孝

温泉之事之事之事略之

山中や菊はたおるる湯の匂ひ　芭蕉

秋の長入かたる湯や世の話　芳氏

白湯は茶碗の如き物なれども
茶の湯の神と称し給へり
まことに仙人なるべし

合掌て湯を入る癖や秋の風　涼菟

仙人とおもふ湯入れば茶　心由

一の湯をもつる和尚の力也　冨田

[illegible]

[illegible]の療治に業れ白い[illegible]　あ[illegible]

[illegible]おく[illegible]　源[illegible]

春アヤ[illegible]

[illegible]ぬ[illegible]　小由

胡蝶の夢を[illegible]　桃妖

[illegible]　[illegible]白

[illegible]に[illegible]　源[illegible]

山中此胡蝶の夢を

[illegible]

胡蝶れ子の夢をあらてあるの元

こゝろいの力の本の[illegible]

この御製ハ[illegible]

又[illegible]人ハ[illegible]

[illegible]て[illegible]

[illegible]

[illegible]

胡蝶荒実社吸酒[illegible]

北枝

八景の内、竈馬(コウロギ)乃橋も
嶽岩にかゝりてころころ
そのかしこにくだけ
泡まく黄石公の沓も流れつ
べし

こうろぎは竹に隠るや橋の霧　涼花

かけし流王孫の橋

秋寒し岩はころころ橋もとら　仝

子延猿

声かれて猿の歯白し岑の月　其角

老の果猿も西にと拝みけり　涼花

舞の手ぬ長し猿の色　如枝

橋より落てつる小猿　江戸 口遊

稲妻の拍や猿の抱くらし　山由

なむいく猿乃逆蔦　里白

六をしおし寝入る猿の声　会津 勝右

神楽の夏ね猿やし岩みと　涼花

雲霧は有猿のおどろき　里円

猿の[illegible]を地や蛙の声　從長
[illegible]や猿の啼かた　涼菊
[illegible]の[illegible]猿の[illegible]　山口
あうをいい切る[illegible]や猿さい　百回
[illegible]寺[illegible]猿の[illegible]の内　角柴
[illegible]猿[illegible]さるみ声　宝吟
[illegible]と猿の[illegible]れ[illegible]　三枝
[illegible]さ[illegible]と[illegible]猿[illegible]　三ノ旭雲

猿の[illegible]　山口
[illegible]猿　桃妖
[illegible]かつく猿のかたりや　扇風
[illegible]猿
[illegible]つと[illegible]や猿の[illegible]　[illegible]
[illegible]引猿　[illegible]
[illegible]の[illegible]や動[illegible]ひ[illegible]て猿[illegible]　里白

うつか猿

ながめとは秋はかくてやうぶほ猿　雪舟

つるさし猿

花生の枝も猿や芋掘つ　源兵

うけ猿

蔵翠とは二けてやさるぬと　桃妖

火焼猿

火と焼て留る猿に秋光き　山由

子拾猿

ぬくとの子猿や柳の子和菓　源花

月和猿

帆をうる猿ぬうやん祝ひ和　峨石

鹿焼猿

流橋は鹿ふたまるる猿の声　山由

猿猿猿

春雨や横目あつまる猿の鼻　源蕓

[illegible]猿

[illegible]かき栗むく猿や作る業　乙由

かくさき猿

[illegible]橋下敵打ちし猿の[illegible]　里臼

[illegible]猿

[illegible]といつまて猿のうら猿　桃妖

[illegible]猿

つくねと[illegible]猿や秋[illegible]　[illegible]

眠猿

[illegible]栗拾ふうら猿　紙猿　金沢　呵友

[illegible]猿

[illegible]栗さ[illegible]むしや猿の俳　扇風

揚枝猿

[illegible]揚枝下猿の姿の邪　里臼

小神猿

[illegible]猿と小猿の[illegible]ふ乙由

[illegible]

秋野に鹿の鳴て猿の声　涼菴

きか猿　全

耳ふさく猿や宿世と穐ぬれ

六猿

ぬさを引猿や素山よりに吉と鳴る事　竹友

癸猿

頬かぶりして初霜冷の猿と笑ひけん　乙由

松谷乃紅葉ハ湯なれハ
三笠山かりの道也桃妖の
かくてまたてを
冬ぬをとる

石山に乃ぞりの秋の色　翁

けふも此知
るあるを

尺とてそり指そり笠も芋かけそり　涼菴

小松

蓑蛙蓑人ハ宮ゐ白粉の秋色　千人

[illegible]川

[illegible]川の四やそあ[illegible]　一涼散

如陽

吟[illegible]酒[illegible]　万子

[illegible]年の[illegible]　牧童

[illegible]の[illegible]　紡坊

[illegible]　八宗

[illegible]　誕者

[illegible]　立推

[illegible]　七弦

[illegible]　北拉

[illegible]　支考

安宅の関みて

宴のあハとも国を急し宴の哭　源芭

寒き夜の笹ハ霜深みて池とても色くもりたる　山由

本文の字の綿もあらうをぶりかな　源芭

流石し淀ひて石垣と草かるる

大船の

鶯や船橋さしてふる雨哭　雲石

草ハ枯やうつむいて見てがけの蟹　雲石

北枝

・廣徳寺にて

拝して見ること人

訪て出して紅漕く海士や芦の花

芦の穂のくるまの出るかり　鶯蛙　源芭

あたんうゝ行き出もきに乗つけて　里揚

竹の浦　里揚

もろ刃さ徳と蛙し竹の浦

ぬらむさあうゝ稲の穂さて　北枝

さ吹ものこそ春乃原・野ゝ　源芭

一[illegible]を[illegible]沙部の松風を
御[illegible]てしひやらまし紅葉の
あかいせ小枝をもみ望を
毎朝[illegible]
[illegible]　源苞

源冥を[illegible]分み[illegible]松の風
澄きるか身を笠[illegible]　里揚

[illegible]まんはと我も[illegible]高砂　少紋

三四

灯を[illegible]冥を一[illegible]萩の色　[illegible]

一羽を安治の白や小田の[illegible]　摘糸

[illegible]　源苞

[illegible]　摘糸抜十一家

かをゆる人は心や春の鶯　琴之

松風の神一[illegible]高砂小紋縮　芦風

目和山

[illegible]山や雲の風　源苞

指を[illegible]業[illegible]源苞の冥八　仝

細呂木

雲ちもあひけらまてやめ給ふ　乙由

松里の音も細呂木やかの鳴り　孤菊

猶長

葉の音も老の耳入れ殿作り　章次

鶯やすれハ見かくやまの門　昨志

ふるもてまいるにきめとうれ　利水

出と毎ハ行とかりふれ月　一変

我為の近ふ行とれ　洞羽率

凍鳥餞別　之の通りの

きくの花梅咲ハ　一百九日　元春

多和川ハ陽宮

ふ百て額馬鞍や　稿きくめ　凍菊

玉江ノ橋

芦ハ北ふ乃　玉江と　全

淺草

あさむつの橋ゝや小雪舟　涼菫

敷賀

紅ゝや法を出所よ　全竹湾　全

妹川

師川

乾竹作笠や富士は妹川　全

師川乃淡深きし秋の風　全

青根

力お撲　夜の出る時まけるうら　許六

多賀大明神

代御神代の むう

伊勢の出より八度神代

御まりゝ代所侍殿

をけ家ゝ

神月もあの山鄙や　神の家　涼菫

柏原　江水亭ゝ

あゝこゝハ文りゝ　一八　全

きの地分点して　烹棚
吟雨五茶のうら　楓人
寒地うら
ちるかハ麻の吟ちん　義法の人　雷臼
近にうら風情せうら　あるき　し由
あれのの茶濃とくるれ吟ちり　涼菊
冥ケ原
石延乃ゆる五樽　松や花をしき　今

家一蓋　望かるも編主石仏の身　大泥　水円
化ちまて茶ちうちをみ　身ん塚　涼菊
鉢もの涼ハあ泥えりの者より
張ハ十山のあるさうて
茶をとるかいて
ちうて結ん
気ちれ徒通み　花の雨　赤坂　水巴
郷郡の巻三吟に志ほうちう　涼菊

大岳の山〳〵作次第を
之別き〳〵ゆ

からかのぼるかけてやれ撫石　源花

ちぢ　哥十

あつまをかすりつゝ秋もまさに異し

十六条　旭雲

頃ハ水無月物部うゝ夢をしうれ

十六条の天王寺の
天王寺

此石撫の玉淀もはるかなる代　源義

撰集の法師のこと〳〵ふるく
伊福トロ岩とくめ伊の日
久方なれ〳〵ふ

拾遺こゝ〳〵ふるいつきの渡
一人して行向知を京ゆ
おもふ

大雄こゝ〳〵なるひつきの渡を　源義

公三七ふる

素荷の日ハ公三るに野ゆ　今

久方なる爲ゆ

楽云ハ桂ゆ紅ゆ　源紙子　関女

追加

海千尋の海底に

袖ふり出して毎月せし越方の

九月十三夜月みて　涼菟

味噌煮かへしたる芋も　芦本

寒(十九)もかへるも皆接木なり　里白

うら枯の多武の山を時雨て　白哥

雲をまとけさ初しぐれ　水車

反朱

年毎の山紅葉を惜みて　七由

いつぬれまさりしさを　莊子

傘に紅葉を入て居る雨寺　季覽

物見がろしに桂を折り　蘭少

いつしかと秋のわるきよそひ哉　汀甘

二階の軒の風を誰か寢ぬ　朱

山秋をそらのうをにあひぬる　苞

まて見よ月に紙屋の南の方　女

泥町は泥もいとの有　白

牛の唐くとそなりて寄也　亦

須ぬ沙弟をに花の咲れ連　市

濡て蓋の陰のしをれ　由

おくるゝ今日の留と言ひ分て　芽

下白の杖の待まるゝ　淡

角立てか白紙部屋出かゝ　か

ぞうろきとて松の門　芦

元禄十七甲申年中春　京寺町二条上ル町
　　南風底本板

大井田杉[illegible]